

原著<論文>

異年齢保育における幼児の乳児に対する養育的行動

北田 沙也加

0～5歳児が共に過ごす保育現場において、2～5歳児の乳児、同輩・幼児、大人に対する行動を観察し、幼児期における乳児に対する特徴的な養育的行動を明らかにし、その生起文脈・要因について検討した。乳児に対する行動の中でも、「接触・愛撫」、「分与・譲渡」、「大人を介する行動」の3つが相対的に乳児に対して多く行われていた。この3つが明白な養育的行動である「世話・援助」に加えて、「幼児や大人に対してはあまり行わず、乳児に対して行う特徴的な養育的行動」であることが示された。また、幼児は自ら積極的に乳児に関わったり、遊びの中で乳児に接したりする中で、養育的行動を行うことが多かった。幼児の乳児に対する養育的行動の生起には、乳児への関心、乳児に関わりたいという気持ちや世話したいという世話欲求が影響している可能性が示唆された。

キーワード：養育的行動、世話行動、幼児期、異年齢保育

Young Children's Nurturing Behaviors toward Infants (Babies) in Multi-age Childcare

Sayaka Kitada

This study investigated how young children's "nurturing behavior" toward infants (babies) emerge in the daycare center where 0- to 5-year-old children interact. Two-five year-olds' behavior toward infants, peers (young children), and adults were categorized in terms of six categories. Results showed that young children's behavior toward infants were more frequently categorized as "touching", "giving", and "interaction through an adult" than those toward peers or adults. Therefore, those behaviors are considered as "nurturing behavior" as opposed to infants that started interactions with infants. It suggests that these behaviors are likely to be caused by young children's interests in infants and their desires to interact with and take care of infants.

Key Word : nurturing behavior, care, young childhood, multi-age daycare

1. 問題と目的

乳幼児が共に過ごす保育現場では、自分より幼い乳児をなでたり、世話をしようとしたりする子どもの姿が見られる。例えば坪井・山口¹⁾は、0～4歳児が共に過ごす保育園で行動観察を行い、同じクラスの子が自分のおもちゃを

黙って持っていくと怒るが、相手が1歳児だと自分の使っていたおもちゃを渡し、関わりをもととした3歳男児の姿や、2歳男児に靴を履かせようとしたり、遊んでいるときに抱っこしようとしたりと世話をやきたがる4歳女児の姿を報告した。このような乳児への関わりは、より早期から見られる。

0～3歳児が過ごす乳児院における行動観察²⁾において、2歳半～3歳の幼児は、少なくとも自分より1年若い相手に対して、まるで自分たちが「仲間」というより「小さいお兄さん・お姉さん」であるかのようにふるまっていた。0～2歳児の異年齢保育の実践記録や観察調査からも、1～2歳児が0～1歳児の世話をしたり、積極的に身体接触をしたりする姿が報告されている^{3) 4) 5) 6)}。

保育現場だけでなく、同じ地域に住む近隣の乳児に対しても、幼児～児童(3～11歳)は物を与える、あやす、世話をするなどの養育的行動を行う^{7) 8)}。さらに保育施設が同じ、近隣に住むなど面識のある乳児だけでなく、初めて会う乳児に対しても幼児は同様に積極的に関わる。実験場面での行動観察においても、幼児は2歳頃から面識のない初対面の乳児に対して、関心をもって関わり、近づき、見つめる、なでる、一緒に遊ぶ、相手をする、気をひきつける、保護者と乳児について話す(大人を介して間接的に関わる)といった行動を示す^{9) 10) 11) 12) 13)}。

このように、幼児は2歳頃から面識の有無に拘わらず、自分より若い乳児に対してなでる、物を与える、世話をするなどの養育的行動をする。またこれらは異なる文化で共通して見られるため^{14) 15)}、乳児に対する行動には本能的な基盤がある可能性が指摘されている¹⁶⁾。しかしこれらの先行研究においては、以下2点について明らかになっていない。

第一に、先行研究のほとんどが幼児の乳児に対する行動や関わりのみを扱っており、相手(受け手)による幼児の行動の違いが明らかではない。先行研究の中でもKaneko & Hamazaki¹⁷⁾やWhiting & Whiting¹⁸⁾は、幼児の行動を分析する際、行動の受け手や受け手との年齢差に着目し、幼児は同輩や大人よりも、自分より若い乳児に対して養育的行動をよく行うことを示した。しかしこれら2つの研究は乳児院(0～3歳児)や近隣のやりとりを対象として1970～80年代に行われたものであるため、

近年の保育園やこども園などより広く利用されている保育施設で見られる相互作用に適用するのは難しいと考えられる。一方で、これまでの保育園やこども園を対象とした研究は、幼児の乳児に対する行動や関わりのみを扱っているため、上記で示された幼児の乳児に対する養育的行動が、乳児に対してよく行う特徴的なものなのか、それとも同輩や大人など乳児以外の者にも行うものなのかということとはわからない。さらには、これまでは異年齢保育の中で見られた乳児に関わる幼児の姿を報告した事例研究が主だった。そのため乳児と共に過ごす中で、幼児は実際どのくらい乳児に関わるのか、どのくらいの頻度・割合で養育的行動を行うのかといったことも明らかになっていない。

第二に、幼児がどのように養育的行動を行うのか、その生起文脈や要因が検討されていない。自身も養育を必要とする時期であるにも拘わらず、幼児が2歳頃から乳児に養育的行動を行うのはなぜなのだろうか。これまでの事例研究は、異年齢交流の効用といった観点から乳児に関わる幼児の姿を報告しており、なぜ幼児が乳児に養育的行動を行うのか、養育的行動はどのような文脈で生起するのかについてはほとんど明らかにされていない。なお、なでる、物を与える、世話をするなどの行動は、向社会的行動や慰めの概念で捉えられることが多いが、幼児の乳児に対する養育的行動はこの概念のみでは説明しきれない。なぜなら、相手が嫌がっているにも拘わらず、遊んでいる2歳男児を抱っこしたり、世話をやきたがる4歳女児の事例¹⁹⁾からもわかるように、幼児の乳児に対する行動は必ずしも利他的ではないからである。行動内容は同じでも、その動機や質が異なるため、利他的なものである向社会的行動の概念²⁰⁾では、幼児の乳児に対する養育的行動を捉えきれない。

近年、共働き家庭の増加や保育形態の多様化、幼保一体化に伴い、保育現場において幼児が乳児に関わる機会はより増えると考えられ

る。しかし、幼児が乳児に関わる姿は保育現場で日常的に見られるものであるにも拘わらず、幼児の乳児に対する養育的行動については、これまでの研究でその現象しか扱われておらず、近視眼的にしか捉えられてきていない。実際に乳幼児に関わる保育士も、乳児に接する幼児への対応に難しさを感じている^{21) 22)}。したがって今後、乳幼児が共に過ごす中での保育・教育を考えていく上でも、幼児の乳児に対する養育的行動の特徴を明らかにし、その生起過程や要因について探ることは重要だと思われる。

以上より、本研究では0～5歳児が共に過ごす保育現場において、幼児による乳児、同輩・幼児、大人に対する行動を比較することで、幼児の乳児に対する養育的行動の特徴を明らかにし、その生起過程・要因について考察する。本研究では特に、次の2点について検討する。第一に、乳児に対する養育的行動の特徴とは何かについて、相手(乳児・幼児・大人)による行動内容の違いの観点から量的に検討する。量的分析を行うことで、異年齢保育において見られる乳児に対する養育的行動がどのようなものであり、どの程度見られるのかを客観的に示すことができる。第二に、幼児の乳児に対する養育的行動が生起する要因や文脈について、事例分析により検討する。行動の生起には行為者・受け手の状況や心理状態、周囲の環境(周囲の人物の有無や保育士の介入など)など多様な要因が影響している。量的分析で示された乳児に対する養育的行動が、どのような文脈で生起するのかを質的に分析することで、これらの影響要因について探る。このように量的・質的に分析することで、幼児の乳児に対する養育的行動の特徴を客観的に捉えると共に、その生起過程や要因を考察する。

2. 方法

(1) 対象児

千葉県内の公立 A 保育所^{注1)}で土曜保育を利用する0歳児3名(男児1)、1歳児13名(男児

6)、2歳児7名(男児5)、3歳児5名(男児2)、4歳児9名(男児7)、5歳児3名(男児1)の計40名。日によって利用する対象児の人数は異なっており、一日あたりの利用者数の平均は14名(範囲=9-18名)であった。

(2) 観察日時

2014年7月～2015年1月の土曜日16日間。

0～1歳児が一人でも土曜保育を利用している日とし、月に2～3回の頻度で観察を行った。午前もしくは午後の0～5歳児が共に過ごす自由遊びの時間に、2.5～3時間観察した。

(3) 手続き

自由記述法による非参与観察を行った。0～5歳児が一緒に過ごす場面において、2～5歳児一人につき5分間の追跡観察を行い、その間の乳児、幼児、大人との関わりや遊びの様子、一人での行動について詳細に記録した。2～5歳児の観察順は日によってランダムとし、一日あたりの観察回数は対象児一人あたり1～3回とした。期間中の観察回数の平均は6.7回(範囲=1～16回)であった。

(4) 分析

分析1では、得られた行動記録についての量的分析を行った。一人での行動か、誰かに対する行動かについて整理するために、「相手」によって分類した。誰かに対する行動、または誰かによって引き出された行動については、その相手によって「乳児(0～1歳児)」に対する行動、「幼児(2～5歳児)」に対する行動、「大人(観察者や保育者、保護者)」に対する行動の3つに分類した。また2～5歳児がどのように関わっていたのかを見るため、「行動内容」について記録を分類した。そして相手による行動内容の違いを検討するため、 χ^2 検定及びFisherの直接確率計算(両側検定)を行った。統計ソフトはSPSS24を用いた。

分析2では、幼児がどのように乳児に関わっ

ていたのか詳細に検討するため、幼児が乳児に関わっていた記録を取り上げ、行為者である幼児、受け手である乳児、保育士や他児などの周囲の状況を整理し、幼児の乳児に対する行動がどのように生じたものか、その生起文脈を質的に分析した。

(5) 倫理的配慮

本研究の遂行にあたり、事前に A 保育所に調査目的を説明し、調査実施への許可を得た。なおプライバシー保護のため、映像・写真は残さずに記録は記述のみとした。本論文に登場する子どもの名前は全て仮名であり、個人が特定できないよう配慮した。

3. 結果と考察

観察から計 1,101 の行動記録が得られた。年齢別の内訳は 2 歳児 261, 3 歳児 167, 4 歳児 441, 5 歳児 232 であった。

分析 1. 乳児に対する養育的行動の特徴

(1) 関わりの相手

誰に対する行動であったか、行動の相手ごとに記録を分類すると、「相手なし（一人での行動）」が 179, 「乳児」に対する行動が 110, 「幼児」に対する行動が 557, 「大人」に対する行動が 255 であった。このうち「相手なし」179, きょうだい同士のやりとり 46, 被援助状況（相手が泣いているなど、他者の援助を必要とする状況）にある 26^{注2)}を除いた 850 の記録を分析対象とした。

(2) 行動内容

2～5 歳児が相手にどのように関わっていたのかを分析するため、行動内容について先行研究^{23) 24) 25) 26) 27)}を基に、表 1 に示す 6 つのカテゴリーに分類した。全体の約 10% にあたる 90 の記録について筆者と大学院生（博士課程）1 名との κ 係数を算出したところ、 $\kappa=.97$ とかなり高い一致率が得られた。

(3) 相手による行動内容の違い

相手別の行動内容の内訳を表 2 に示した。相

表 1 「行動内容」の具体例と記録数 (%)

	定義	具体例	記録数 (%)
協同・主張	遊びや活動を共にする、自分の気持ちや考えを相手に言葉や身振りで伝えるなど、相手に関わる行動	電車で遊んでいるレン (2 歳児) と一緒に遊ぶ／前に並んでいるオトハ (5 歳児) と話を <u>する</u>	616 (72.5)
接近・凝視	近づく、見る、相手について言及するなど、相手に関心を持っているが直接的な関わりはない行動	かけっこをしているオトハを見る／笑っているケンタ (0 歳児) を見て「かわいい」と <u>言う</u>	136 (16.0)
接触・愛撫	相手の頭や身体をなでたり触ったりする行動	遊んでいるトオル (1 歳児) の頭をなでる／保育者に抱きつく	37 (4.4)
分与・譲渡	相手に物を与えたり与えようとしたりする、もしくは順番や遊んでいる場所を譲る行動	ユキ (1 歳児) におもちゃを差し出す／マサヤ (4 歳児) に貸してほしいと言われて「いいよ」と遊んでいたサイコロを貸してあげる	32 (3.7)
大人を介する行動	相手の存在や特徴を周囲の大人に伝えたり聞いたりする、もしくは大人の行動を手伝うなどして間接的に相手と関わる行動	「せんせいいた」と保育者に観察者の存在を伝える／三輪車を止めたハヤテについて「だってハヤテくん電池きれちゃったんだって」と観察者に言う	15 (1.8)
世話・援助	相手の身辺を整えたりトラブルのケアをしたりして相手を快適な状態にする、もしくは相手ができないことをできるように手助けしたりルールを教えたりする行動	線路を片付けているレンを手伝う／メグミ (1 歳児) のズボンについている砂をはらう	14 (1.6)

※下線部は対象児の行動内容を示す。

表2 相手×行動内容の記録数 (%)

	協同・主張	接近・凝視	接触・愛撫	分与・譲渡	大人を介する	世話・援助
対乳児 n=88	38 (43.2) ---	20 (22.8)	9 (10.2) +++	9 (10.2) +++	9 (10.2) +++	3 (3.4)
対幼児 n=507	393 (77.5) +++	74 (14.6)	10 (2.0) ---	17 (3.3)	6 (1.2)	7 (1.4)
対大人 n=255	185 (72.5)	42 (16.5)	18 (7.1) +++	6 (2.4)	0 (0.0) ---	4 (1.6)
全体 N=850	616 (72.5)	136 (16.0)	37 (4.4)	32 (3.7)	15 (1.8)	14 (1.6)

* -- $p<.001$ で少ない, +++ $p<.001$ で多い

手×行動内容の Fisher の直接確率計算を行ったところ有意な偏りが見られた ($p=.001$)。残差分析を行ったところ「接近」, 「世話・援助」以外のカテゴリで相手による有意な偏りが見られたため, 表2に記号で示した。相対的に乳児に対して多く行っていたものは, 「接触・愛撫」, 「分与・譲渡」, 「大人を介する行動」の3つであった。

これまで幼児が乳児に対してなでる, 物を与える, 乳児について保育者・保護者と話すなどの行動をすることは報告されていたが, 先行研究は事例研究であったため, 幼児の関わる姿の記録に過ぎなかった。本研究で新たに, これらの養育的行動がどの程度の割合で生じるのかが明らかになった。直接的な養育的行動である「世話・援助」は全体としては少なく, より間接的に関わる方が多いことがわかった。本研究は少人数での保育だったため, 幼児同士や保育士とのやりとりは密なものとなり, 折り紙のやり方やゲームのルールを同輩に説明したり, 準備や片づけをしている保育士を手伝ったりする幼児の姿が見られた。このように幼児や大人に対する「世話・援助」も一定数見られたのが有意な結果が得られなかった原因だと思われる。

以下では, 直接的な養育的行動である「世話・援助」に加えて, 同輩や年長の子ども, 大人にはあまり行わず, 乳児に対してよく行う「接触・愛撫」, 「分与・譲渡」, 「大人を介する行動」を「乳児に対する養育的行動」とし, それぞれのカテゴリに分類された行動の特徴に

ついて, その概要を記述する。

1) 接触・愛撫

「接触・愛撫」は乳児だけでなく大人に対しても相対的に多く行っていたが, 乳児に対するものと幼児や大人に対するものでは, 具体的な内容が異なる。乳児に対するものでは乳児の頭や頬をなでるように触る行動がほとんどであったが, 幼児や大人に対して頭・頬を触る行動は全く見られなかった。そのため, 「接触・愛撫」の中でも特に「頭や頬を触る行動」が乳児に対して相対的によく行う養育的行動であるといえる。また, 幼児や大人に対する「接触・愛撫」は, 「一緒に遊ぶ中でちょっかいをかけるように同輩の背中を触る」「スキンシップを求めて保育士に抱きつく」というように遊びの一環として行われたり, その後のやりとりを求めたりする双方向的な関わりであった。大人に対する「接触・愛撫」が相対的に多く見られたのは, 心の安定を求めて保育士に抱き着いたり, 保育士のひざの上に座って触れ合ったりといった行動が多く見られたためだと考えられる。一方, 乳児に対する「接触・愛撫」は, 「一人で遊んでいる乳児に近づいて頬を両手ではさむように触る」というように遊びやその後のスキンシップが目的ではなく, あくまでも「触れること」自体が目的であるように思われる。遊びの文脈の中で行われるものではなく, 「そこに乳児がいるから触る」「触りたいから触る」といった自分本位の行動だといえるのではないだろうか。幼児は「乳児＝なでて可愛がるもの」と考

えているのかもしれない。以上から、「接触・愛撫」は乳児だけでなく大人に対しても相対的に多く見られたが、その質的な違いから、特に「頭・頬への接触・愛撫」が乳児に対して相対的に行うことの多い「養育的行動」だといえる。

2) 分与・譲渡

幼児や大人に対するものは少数だったが、一緒に遊ぶ中で生じたやりとりがほとんどだった(例、「貸して」といわれて「いいよ」とおもちゃを渡すなど)。一方、乳児に対するものは、寝転がっていたり座って遊んでいたりする乳児に、おもちゃなどを渡しに行くという行動が多かった。ハイハイや寝転がって遊ぶ乳児は、まだ歩行が自立しておらず、スムーズに自分で移動しておもちゃを探したり取りに行ったりすることが難しいため、幼児は乳児が遊べるようにおもちゃを渡したのだろう。また乳児に関わりたい気持ちはあるが、直接どのように接したらよいかわからなかったため、おもちゃを介して間接的に関わろうとしたのかもしれない。

3) 大人を介する行動

幼児に対するものは少数だったが、入ってはいけないうちで遊んでいた友達について「あそこで遊んでたよ。だめだよね？」などと園でのルールを確認するように保育士に伝える行動がよく見られた。一方、乳児に対するものでは、「電車使ってる」「笑った！」などと乳児の様子や行動について嬉しそうに保育士に話す行動が多かった。保育園で日常的に乳児の世話をする保育士の姿を見ているため、幼児は乳児への関わり方や乳児の様子を確かめるように、乳児について保育士と話すのだろう。このような大人とのやりとりの中で、幼児は乳児について理解を深めたり、乳児への適切な関わり方を学んでいると考えられる。また、乳児と接した喜びを保育士に受け止めてもらいたいという気持ちの現れだとも考えられる。

分析2. 乳児に対する養育的行動の生起文脈

分析2では、上記で明らかになった乳児への

養育的行動がどのような要因によって生起するのかについて事例分析により詳細に検討する。乳児に対する行動記録88を取りあげ、各行動が生じた背景やきっかけについて整理することで、幼児の乳児に対する養育的行動が起りやすい文脈の特徴を明らかにする。以下の文中や事例の下線部は幼児の乳児に対する行動を指し、【 】は分類されたカテゴリーを指す。乳児に対する行動88のうち10は、「ブロックで電車を作って遊んでいたレン(2歳男児)は、保育士と歌って遊んでいるクミ(1歳女児)を見る【接近・凝視】」というように、遊んでいる最中や活動の合間に、別の遊びをしている乳児を見たり乳児に近づいたりするものであった(「接近・凝視」がほとんどであった)。行動が生起するに至った明確な文脈が読み取れないこれらの行動を除いた78の行動記録は、以下4つに整理できた。

(1) 自発的に乳児に関わる

幼児自ら乳児に接近し、積極的に関わっていた行動は78記録中31であった。その中でも13の記録が、事例1のように自発的に関わり始め、自ら違う遊び・活動に移って終わるという行動の始まりも終わりも幼児次第の一方的な関わりであった。

事例1 モモ(2歳女児)→ケンタ(0歳男児) 一方的な養育的行動

モモは寝転がっているケンタに近づき、ケンタの足を触ったり、両手ではさむように頬を触ったりする【接触・愛撫】。そばにいた保育士に渡された哺乳瓶のおもちゃを振り、欲しそうに手を伸ばしてくるケンタに哺乳瓶を渡し【分与・譲渡】、飲ませるふりをして「ごくごく」という。そして近くにいた観察者に「ミルクのませてあげちゃった」と嬉しそうに言う【大人を介する行動】。その後ケンタがハイハイをしていると、モモは追いかけて足をつかむように触ったり【接触・愛撫】、「ケンタくん」と呼びかけたりする【協同・主張】。モモは保育

室に入ってきた保育士に気づくとそちらに行き、ケンタのもとを離れる。

事例1でモモは、寝転んで遊んでいるケンタに近づき、身体や顔をなで、哺乳瓶のおもちゃを与えてミルクを飲ませるふりをしている。観察者にケンタに関わったことについて嬉しそうに報告していることから、モモはなでたりおもちゃを与えたりすることでケンタを可愛がっているのだろう。しかしケンタの反応を見たり、ケンタの応答に合わせて接したりということはなく、モモがしたいように関わる「自分本位」の行動であるように感じられる。

このような自分本位の行動の半分以上が、なでる・おもちゃを渡すといった「養育的行動」であったのは興味深い。先行研究でもこの事例と同様に、年下の子のお世話をしようとしたり抱っこしようとしたりして、嫌がられてしまう4歳女児の姿が報告されている²⁸⁾。これらの幼児は「乳児と一緒に遊びたい、やりとりしたい」というよりも、「乳児に関わりたい」という気持ちや「世話したい」という世話欲求が強かったために、一方的な関わりになったのだと考えられる。2歳頃から養育的行動を行うのは本研究および先行研究で示されてきたが、それは自我の芽生えや生活習慣の自立に伴い、自分のできることが増えた喜びから「やってあげたい、世話したい」という気持ちが少なからず影響しているのかもしれない。

一方、自発的な行動の中でも自分本位ではなく乳児と双方向的なやりとりができるようにはたらきかける行動が18見られた。

事例2 サクラコ（4歳女児）→ケンタ（0歳男児）双方向的なやりとり

サクラコは座って遊んでいるケンタの前へ行き、笑いかけながらケンタの目の前にあったカエルのパペットを渡す【分与・譲渡】。ケンタがパペットをいじりながらサクラコを見つめる様子を見ながら、サクラコはケンタに顔を近づ

けて「カッコッカッコッ」と舌を鳴らして音を出して注意を引き付ける【協同・主張】。ケンタが笑うとサクラコも笑い、「笑った」と嬉しそうに観察者に報告する【大人を介する行動】。ケンタがニコニコ笑っているのを見たサクラコは「かわいい」と呟く。

事例2でサクラコは、ケンタにカエルのパペットを渡し、ケンタが遊ぶ様子をじっと見たり、注意を引き付けて笑い合ったりしている。ケンタの様子を注意深く観察し、見られて見つめ返す、笑いかけられて笑い返すというように、ケンタが発するサインに敏感に反応した応答的な関わりとなっている。事例2はこの後おやつ準備に入ったため、サクラコは必然的にケンタから離れたが、おやつがなかったらまた新たな形でケンタとのやりとりが始まっていただろう。

このような双方向的なやりとりでは「協同・主張」が一番多かったが、養育的行動の1つである「分与・譲渡」が次いで多かった。事例1のように一方的になでて可愛がるだけでなく、おもちゃを渡して乳児の反応を待ったり、乳児に合わせて行動したりしたために、乳児との双方向的なやりとりが可能となり、一緒に遊ぶ「協同・主張」が多く見られたのだろう。乳児からの反応が返ってくると嬉しく、もっと関わりたい、可愛いという気持ちが強まり、さらなるやりとりに発展していく。

同じ自発的に行われた行動でも、その動機となる気持ちの違いにより、一方的で自分本位な関わりか、双方向的なやりとりに分かれた。養育的行動、特に「接触・愛撫」は乳児への強い関心や幼児の世話欲求がその生起に関わっている可能性が示唆された。

(2) 遊びの中で乳児に関わる

一緒に遊んだり行動を共にしたりする中で見られた乳児に対する行動は78記録中18であった。これらは「アキヒロ（4歳男児）は、二人乗り三輪車の後ろの席にトオル（1歳男児）を

乗せ、一緒に所庭を探索して遊ぶ【協同・主張】といった「協同・主張」がほとんどであったが、事例3のように、遊びの文脈の中で養育的行動が見られた事例が2つあった。

二人乗り三輪車に乗るハヤテは、後ろにメグミを乗せて一緒に所庭を回ることを楽しんでいる。そこでいつ気づいたのかは不明だが、メグミのズボンに砂がついて汚れていることに気づき、三輪車からおりて砂をはらってきれいにしてあげている。ハヤテは同輩であるレン（2歳男児）とも同様に、この二人乗り三輪車で所庭を回って遊んだこともあったが、その際はこのような相手の服の汚れを気にしてきれいにするような行動は一切見られなかった。乳児と一緒に遊んでいても、やはり同輩と同じく対等に接しているわけではなく、どこかで「自分より幼いもの」として認識し、気にかけているのだと思われる。メグミの様子を見た保育士の声かけからも、ハヤテは「自分はメグミよりお兄さんだ」とより意識することとなっただろう。

**事例3 ハヤテ（2歳男児）→メグミ（1歳女児）
遊びの中で見られる「世話・援助」**

ハヤテは後ろにメグミを乗せて二人乗り三輪車をこいで、所庭を回る【協同・主張】。その後ハヤテは一度三輪車から降りて、メグミのズボンについた砂をはらう【世話・援助】。ハヤテが再び三輪車に乗ると、メグミは嬉しそうに観察者に手を振り、ハヤテもまた三輪車をこぎだす。通りかかった保育士が「いいなーメグミちゃん。嬉しそうな顔してるよ、ハヤテくんありがとね。」と声をかけると、ハヤテも嬉しそうにしている。その後しばらくハヤテはメグミを後ろに乗せて所庭を回る【協同・主張】。

遊びの中で見られる乳児に対する行動は、乳児と一緒に遊ぶといった「協同・主張」がほとんどだが、遊びの中で養育的行動が出ることもある。それは一緒に遊ぶ中でも乳児を「自分と対等なもの」ではなく、「自分より幼いもの」

だと認識しているために生じるのだと考えられる。

(3) 乳児からの働きかけに反応する

乳児が近づいてきたから反応するというように、乳児自身がきっかけとなった行動は、78記録中16であった。そのほとんどが、事例4のように乳児に遊びを邪魔されたから拒否するというものであった。

事例4でマサヤは、友達と作った線路で遊ばれるのが嫌で、近づいたり遊ぼうとしたりするレイヤを徹底的に拒否している。途中で様子を見ていた保育士がマサヤに「レイヤくん小さいからさ」となだめるように声をかけたが、マサヤは「だってやるんだもん」と不服そうに返し、その後もレイヤを近づかせないような行動を続けていた。歩行が自立し活動範囲が広がった1歳以降の乳児は、誰が遊んでいたかなどを気にすることなく、気になったものを手に取ったり、遊んだりして世界を広げている。事例4のレイヤも、マサヤたちが楽しそうに遊んでいたからこそ、マサヤたちの電車や線路で遊んでみたかったのだろう。レイヤ自身は興味のあるもので遊びたいだけでマサヤたちを邪魔している気はないが、マサヤからすると勝手に自分たちのものを使われると自分たちが遊べなくなるため、邪魔されたと感じ、拒否する。友達同士で楽しく遊んでいたからこそ、なおさらそこに乳児が入ってくるのが嫌だったのだろう。

**事例4 マサヤ（4歳男児）→レイヤ（1歳男児）
遊びを邪魔されて拒否する**

マサヤは同級生のトシキ、マサキ、アキヒロと一緒に線路をつなぎ、電車のおもちゃで遊んでいる。そこにやってきたレイヤが落ちていた電車を走らせて遊び始めると、マサヤは「やめて」と言ってレイヤの電車を取ろうとするが【協同・主張】、レイヤは「あー」と言って嫌がる。マサヤは「だめ、やめて」と言ってレイヤが電車を走らせようとするのを邪魔する【協同・主張】。

乳児に反応して生じた行動は、このような乳児に遊びを邪魔されて拒否するというものがほとんどだったが、1事例のみ「サクラコ（4歳女児）は近づいてきたトオル（1歳男児）に後ろから抱きつくように触る【接触・愛撫】」というように、養育的行動の「接触・愛撫」が見られた。このサクラコの場合は、所庭に出る前の準備をしている場面であり、遊びや活動に熱中しているわけでもなかったため、近づいてきたトオルを拒否することなく、抱き着くことでスキンシップを図ったのだろう。

このように、乳児に反応して生じた行動は、そのほとんどが友達と遊んでいるときに乳児が近づいてくるものだったので、遊びを邪魔されないよう拒否する「協同・主張」が大半を占めた。今回はほとんど見られなかったが、友達同士で遊んでいるときでなかったり、遊んでいるときでも乳児と一緒に遊んでもいいと思えば、養育的行動が生じる可能性もあるだろう。

(4) 他児のまね・保育士による促し

他児や保育士がきっかけとなって生じた乳児に対する行動は78記録中13であった。そのうち他児のまねをして乳児に関わったのが7、保育士がきっかけとなったのが6であった。ここでは保育士がきっかけとなったものを取りあげ、幼児が乳児に関わる場面での保育士の介入・援助について考察する。保育士がきっかけとなったものでは、事例5のように保育士が乳児と関わるよう勧めたが直接的な関わりには発展せず「接近・凝視」に留まるものが3事例見られた。

事例5 モモ（2歳女児）→トオル（1歳男児） 保育士に勧められるが関わらない

モモは机に向かってシール貼りをして遊んでいる。モモの背後の机でトオルと一緒にパズルをやっていた保育士が「モモさん、モモさんならこれできるでしょ、手伝って」とモモに呼びかけると、モモは振り返った後首を横に振り、またシール貼りをする。その後たまにトオルの

方を振り返って見ながらも【接近・凝視】、シールをたくさん貼っていく。

事例5でモモはシール貼りをして遊んでいるときに、トオルのパズルを手伝ってほしいと保育士に声をかけられるが、自分の遊びを中断してトオルに関わりに行くことはせず、シール貼りを続けている。保育士に声をかけられた後はトオルを気にするように振り返る姿が観察されたが、シール貼りの遊びを終えた後もトオルに関わりに行くことはなく、別の遊びをしていた。

モモは普段から乳児に強く関心を持ち、よく乳児に近づいてなでたり、おもちゃを渡したりする養育的行動を行うことが多いが、今回はシール貼りに夢中になっていたため、保育士に頼まれてもトオルに関わりに行くことはしなかったのだろう。今回は保育士もトオルのそばにいたため、特に今遊びを中断してまで乳児に関わる必要性をモモは感じなかったのだろう。

保育士がきっかけとなり乳児と幼児の間に関わりが生じることもあるが、遊びに夢中になっているときに幼児と乳児を無理に関わらせる必要はない。これまで見てきた通り、幼児は自発的に乳児に関わったり、遊びの中で乳児と接したりしている。保育士は其中で、必要に応じて幼児に乳児への安全な接し方を伝えていくべきだろう。

4. 総合考察

本研究は、0～5歳児が共に過ごす保育施設における幼児の乳児に対する養育的行動の特徴、およびその生起文脈・要因について、量的・質的に検討した。

(1) 幼児の乳児に対する養育的行動

幼児の乳児に対する養育的行動の特異性を明らかにするため、0～5歳児が共に過ごす保育場面で観察調査を行い、2～5歳児の乳児に対する行動を幼児や大人に対する行動と比較し

量的分析を行った。直接的な養育的行動である「世話・援助」は少数だったため、相手による有意な偏りは見られなかったが、乳児に対する行動の中でも「接触・愛撫」、「分与・譲渡」、「大人を介する行動」の3つが相対的に乳児に対して多く行われていた。そのため、「世話・援助」にこれら3つを加えた4つの行動が、「相手が乳児だからこそ行う特徴的な養育的行動」であることが示唆された。幼児は頭や頬をなでることによって乳児を可愛がり、乳児が遊べるようにおもちゃなどを渡したり、乳児の世話をする人物である大人に乳児の様子を知らせたりする。全体的に幼児が乳児に養育的行動を行う割合は少なかったが、幼児が乳児を「同輩や大人とは異なる、自分より幼い存在」として認識しているからこそ、乳児に養育的行動を行うのだろう。

(2) 乳児に対する養育的行動の生起文脈・要因

幼児の乳児に対する行動の生起文脈を質的に分析したところ、幼児は自ら積極的に乳児に関わったり、遊びの中で乳児に接したりする中で、養育的行動を行うことが多いことが明らかになった。一方、乳児に応答する形や、保育士に促される形で乳児に関わる場合は、養育的行動ではなく乳児を拒む、乳児を見るだけに留まるといった行動が多かった。このことから、乳児に対する養育的行動は、幼児が自発的に行うことが多いといえる。さらに幼児の養育的行動は、乳児の状況や文脈に合った適切なやりとりというよりは、乳児の反応を顧みない幼児の一方的で自分本位な関わりである場合が多かった。幼児が乳児に関心をもち、「関わりたい、世話したい」という思いが強いからこそ、自発的・積極的に乳児に関わる姿が見られたのだろう。

以上から、幼児の乳児に対する養育的行動の生起には、乳児への関心、乳児に関わりたいという気持ちや世話したいという世話欲求が影響している可能性が示唆された。さらに幼児が乳

児に養育的行動をするか否かは、幼児自身の遊びや活動への夢中度や取り組み方に大きく左右されることが示された。

(3) 保育現場への示唆と今後の課題

1) 養育的行動を行う幼児への保育士の対応

保育現場で幼児の乳児に対する養育的行動が見られた場合、保育士はどのように関わったらよいのだろうか。特に1, 2歳児頃の乳児に対する行動は、保育現場でもその対応の難しさが指摘されており²⁹⁾、保育士は乳児の安全性を確保するため、幼児の乳児に対する関わりを規制する傾向にある³⁰⁾。しかし、文脈に合った適切なものではなくても、幼児が乳児に養育的行動を行うのは、幼児が乳児を自分より幼いものだと認識し、他者を思いやったり、自分のできることが増えたために世話欲求が芽生えるようになった発達の一つの現れだと考えられる。そのため保育士は、乳児の安全性を確保するために幼児の行動を制限するのではなく、「乳児に関わりたい」という幼児の気持ちを大切にしつつ、乳児に危害が及ばない安全な関わり方を伝えていくこと、乳児の遊びも保証できるよう働きかけることが求められるだろう。

2) 今後の課題

最後に、本研究において幼児の乳児に対する養育的行動の特徴が明らかとなり、これらは2歳児頃から行うことが示されたが、幼児全員が乳児に対して養育的行動をするわけではない。

観察対象児の中でも、養育的行動をよく行う子やあまり乳児に関わらない子など、多様なタイプの幼児がいた。このような養育的行動の表出の違いには、幼児のきょうだいの有無や数、幼児自身の行動特徴(気質)、親の養育態度や担当保育士の関わり方など、様々な要因が影響していると考えられる。今後はこれらの要因が幼児の養育的行動に及ぼす影響や、そのメカニズムについて検討する必要がある。

また、本研究は1園の土曜保育での乳幼児の

関わりという限られたサンプルを対象としたため、協力園の特徴や子ども同士・保育士との関係性が反映されている。特徴が異なる複数園で調査を行い、サンプル数を増やして幼児の養育的行動の普遍性を検討することが今後の課題として挙げられる。ただ本研究のサンプリングで、普段とは異なる保育形態・仲間関係の中で乳幼児の自然な相互作用を捉えることができた。このことは、現在広く利用されている時間外保育（延長保育）や預かり保育などで、普段とは異なる異年齢保育の形態をとる保育園や子ども園での乳幼児の関わりや保育・教育を考えていく一助となるだろう。

注

(注1) A 保育所では、0～2歳児に年齢別保育、3～5歳児に縦割り保育を行っており、0～2歳児各1学級、3～5歳児2学級、一時預かり（0～5歳児混合）1学級の6学級で編成されている。土曜保育は利用する子どもの人数が少ないため、0～5歳児合同保育を行うことが多かった。

(注2) 被援助状況は保育士の介入が入りやすく、対象児の日常的で自発的な行動が得にくいと考えたため、分析対象外とした。なお、相手の状況について「被援助」か「通常（遊んでいるなど他者の援助を必要としない状況）」に分類した一致率は $\kappa = .88$ であった。

引用文献

- (1) 坪井敏純・山口郁（2005）異年齢保育の中の子どもたち。南九州地域科学研究所所報, 21, 1-10
- (2) Kaneko, R. & Hamazaki, T. (1987). Prosocial behavior manifestations of young children in an orphanage. *Psychologia*, 30, 235-242.
- (3) 江口純代（1978）保育園1歳児における子ども間の相互交渉について：異年齢グループでのあそび場面の分析。日本教育心理学会第20回総会発表論文集, 60-61
- (4) 光本涼子・古川律子・久保節枝・大瀬戸愛・中原正博（2000）異年齢児クラスにおける関わりでの育成と発達の保障に関する研究。広島女子大学子ども文化研究センター研究紀要, 5, 91-103
- (5) McGaha, C. G., Cummings, R., Lippard, B. & Dallas, K. (2011). Relationship building: Infants, toddlers, and 2-year-olds. *Early Childhood Research and Practice*, 13(1). <http://ecrp.uiuc.edu/v13n1/mcgaha.html>（情報取得 2017/5/2）
- (6) 大桑萌（2014）0～2歳児の仲間関係における模倣の役割。保育学研究, 52(2), 172-182
- (7) 根ヶ山光一（2012）アロマザリングの島の子どもたち—多良間島子別れフィールドノート。新曜社
- (8) Whiting, B. B. & Whiting, J. W. M. (1978) 六つの文化の子供たち：心理—文化的分析（名和敏子，訳）。誠信書房。
(Whiting, B. B. & Whiting, J. W. M. (1975). *Children of six cultures: A psycho-cultural analysis*. Harvard University Press.)
- (9) Berman, P. W., Monda, L. C. & Myerscough, R. P. (1977). Sex differences in young children's responses to an infant: An observation within a day-care setting. *Child Development*, 48, 711-715.
- (10) Berman, P. W., Smith, V. L. & Goodman, V. (1983). Development of sex differences in response to an infant and to the caretaker role. *The Journal of Genetic Psychology*, 143, 283-284.
- (11) Jessee, P. O., Strickland, M. S. & Jessee, E. J. (1994). Infant and toddler interactions with a new infant in a group environment. *Early Child Development and Care*, 100, 57-68.
- (12) Lee, Y-C. & Jessee, P. O. (1997). Taiwanese infants' and toddlers' interactions with a baby in a group setting. *Early Child Development and Care*, 134, 75-87.

(13)Melson, G. F. & Fogel, A. (1982). Young children's interest in unfamiliar infants. *Child Development*, 53, 693-700.

(14)前掲(12).

(15)前掲(8).

(16)同上

(17)前掲(2).

(18)前掲(8).

(19)前掲(1)

(20)Mussen, P. & Eisenberg, N. (1980) 思いやりの発達心理 (菊池章夫, 訳). 金子書房. 6. (Mussen, P. & Eisenberg, N. (1978). *Roots of Caring, Sharing, and Helping : Development of Prosocial Behavior in Children*. W. H. Freeman.)

(21)阿部和子 (1991) 幼児の自発的行動に関する研究Ⅲ—乳児期の子ども同士の関わりを中心に—. 聖徳大学研究紀要：短期大学部, 24, 51-66

(22)前掲(5).

(23)前掲(9).

(24)前掲(10).

(25)前掲(11).

(26)前掲(12).

(27)前掲(13).

(28)前掲(1)

(29)同上

(30)前掲(5).

謝辞

本研究にご協力くださいました A 保育所の保育士の先生方, 及び子どもたちに心より感謝申し上げます。

また本研究についてご指導・ご助言くださいました植草学園短期大学の中澤潤教授, 埼玉大学の清水由紀准教授に深く御礼申し上げます。

付記

本論文はその一部を日本発達心理学会第28回大会, 日本保育学会第70回大会にて発表した。